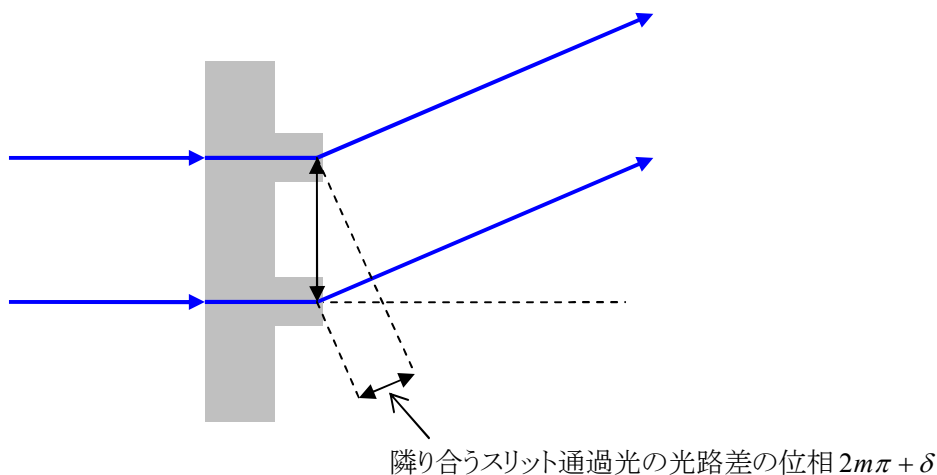


## スリット通過光の干渉と光の強度分布

はじめに 合成波の方程式を図形を利用して求める方法

 $m$  次の明線と  $m+1$  次の明線の間での回折光の干渉を例に $m$  次の明線と  $m+1$  次の明線の間での回折光

隣り合うスリットからの回折光の光路差は、

 $m$  次の明線ができる場合は  $m\lambda$  ,  $(m+1)$  次の明線ができる場合は  $(m+1)\lambda$  だから、それぞれの位相は  $2m\pi$  ,  $2(m+1)\pi$  である。よって、 $m$  次の明線と  $(m+1)$  次の明線の間での回折光の場合、隣り合うスリットからの回折光の光路差の位相は、 $2m\pi + \delta$  ( $0 < \delta < 2\pi$ ) と表わせる。ゆえに、このときのスリット 1 からの回折光とスリット 1 から数えて  $k$  ( $k=1,2,3,\dots$ ) 番目のスリット(以後『スリット  $k$ 』)からの回折光の光路差の位相は  $2m\pi + (k-1)\delta$  である。

以上から、

スリット 1 からの回折光のスクリーン上の観測点における変位  $y_1$  を

$$y_1 = A_0 \sin(\omega t + \alpha) \quad (A_0 \text{ は振幅, } \omega \text{ は角振動数で単振動の周期を } T \text{ とすると } \omega = \frac{2\pi}{T}) \text{ とすると,}$$

その位相は  $\omega t + \alpha$  だから、スリット  $k$  からの回折光の変位  $y_k$  は、

$$y_k = A_0 \sin\{\omega t + (k-1)\delta + \alpha\} \text{ となる。}$$

よって、スリット 1 からスリット  $N$  までの  $N$  本の回折光の合成波の変位を  $Y_S$  とすると、

$$Y_S = \sum_{k=1}^N y_k = A_0 \sum_{k=1}^N \sin\{\omega t + (k-1)\delta + \alpha\}$$

となる。

しかし、これを計算して  $Y_S$  の振幅と位相を求めるのは煩雑(計算方法は後述)である。そこで、 $y_k = A_0 \sin\{\omega t + (k-1)\delta + \alpha\}$  をベクトルで視覚化することで、 $Y_S$  の振幅と位相を図形的に求める方法について解説する。

## 方法の概要

$y_k = A_0 \sin\{\omega t + (k-1)\delta + \alpha\}$  を極座標の成分表示ベクトルで表し、これを継ぎ足していくことより、 $Y_S$  を視覚化する。

### 手順 1

$xy$  直交座標平面上に、原点  $O$  を極、 $x$  軸方向を始線、 $\omega t + (k-1)\delta + \alpha$  を偏角、 $A_0$  を動径とする極座標をとる。

すると、 $y_k = A_0 \sin\{\omega t + (k-1)\delta + \alpha\}$  を表す極座標を  $A_k$  とすれば、原点  $O$  を中心とする半径  $A_0$  の円周上に点  $A_k (A_0, \omega t + (k-1)\delta + \alpha)$  がとれる。

### 手順 2

原点  $O$  を定点とする位置ベクトル  $\overrightarrow{OA_k}$  を  $\vec{A}_k$  と表すと、 $\vec{A}_k = \begin{pmatrix} \omega t + (k-1)\delta + \alpha \\ A_0 \end{pmatrix}$

また、極座標系と  $xy$  直交座標系を重ね合わせれば、直交座標の  $y$  座標は  $y = A_0 \sin\{\omega t + (k-1)\delta + \alpha\}$  となることから、スリット  $k$  からの回折光の観測点における変位  $y_k$  を表していることがわかる。

### 手順 3

合成波のベクトルを  $\vec{A}_S$  とすると、

$$\vec{A}_S = \sum_{k=1}^N \vec{A}_k = \vec{A}_1 + \vec{A}_2 + \vec{A}_3 + \cdots + \vec{A}_k + \cdots + \vec{A}_N$$

ここで、各ベクトルを継ぎ足していけば、その終点と極  $O$  を結ぶ線分の長さは合成波  $Y_S$  の振幅、その線分と始線のなす角は合成波  $Y_S$  の位相、 $y$  座標が  $Y_S$  の変位を表す。

この方法は、合成波の振る舞いをアナログ的に理解するにはもってこいである。

## 補足

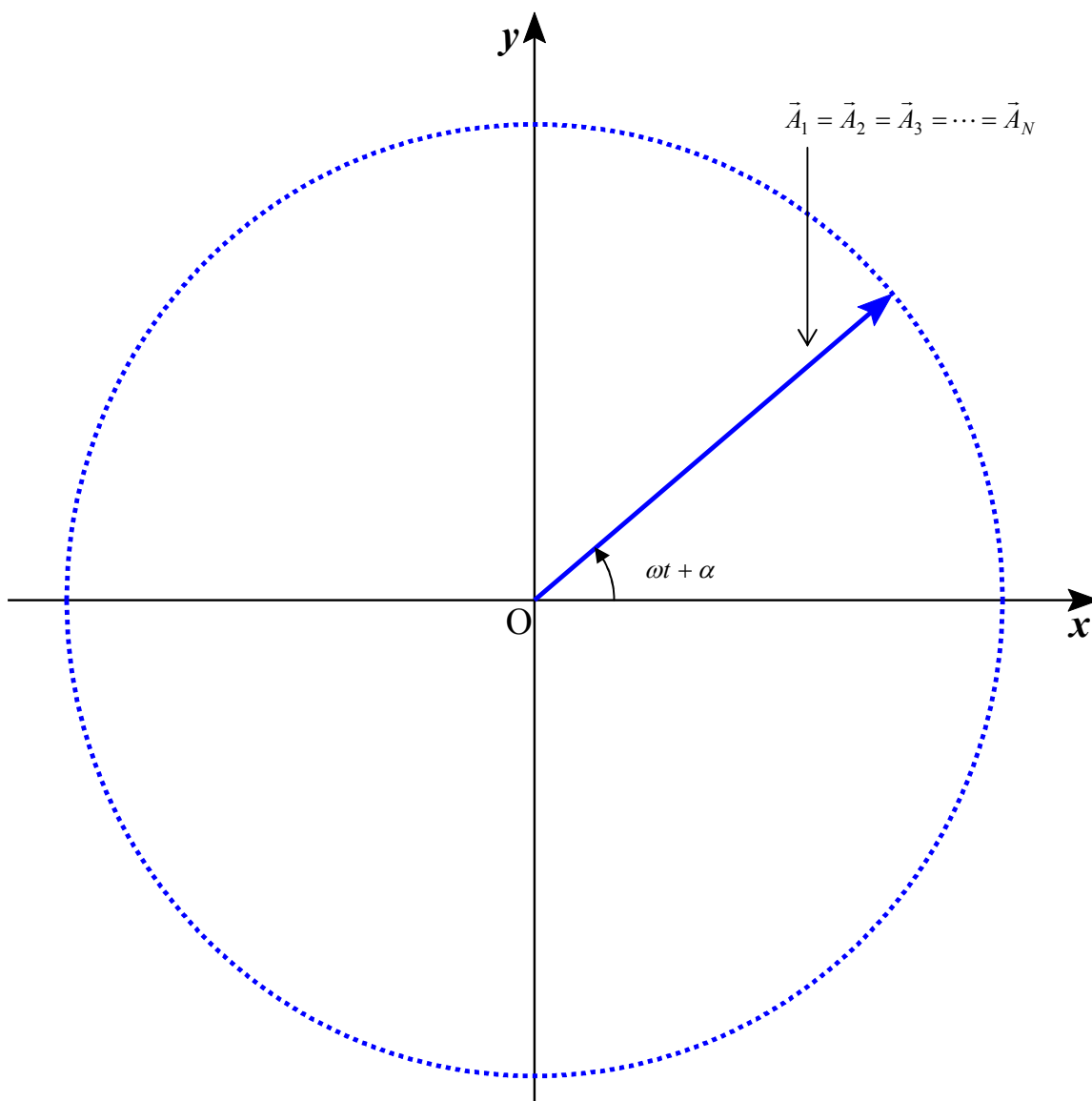
### 位相

三角関数の方程式  $y = a \sin f(t, x)$  が振動や波動の方程式の場合、角を表す部分  $f(t, x)$  を位相とよぶ。

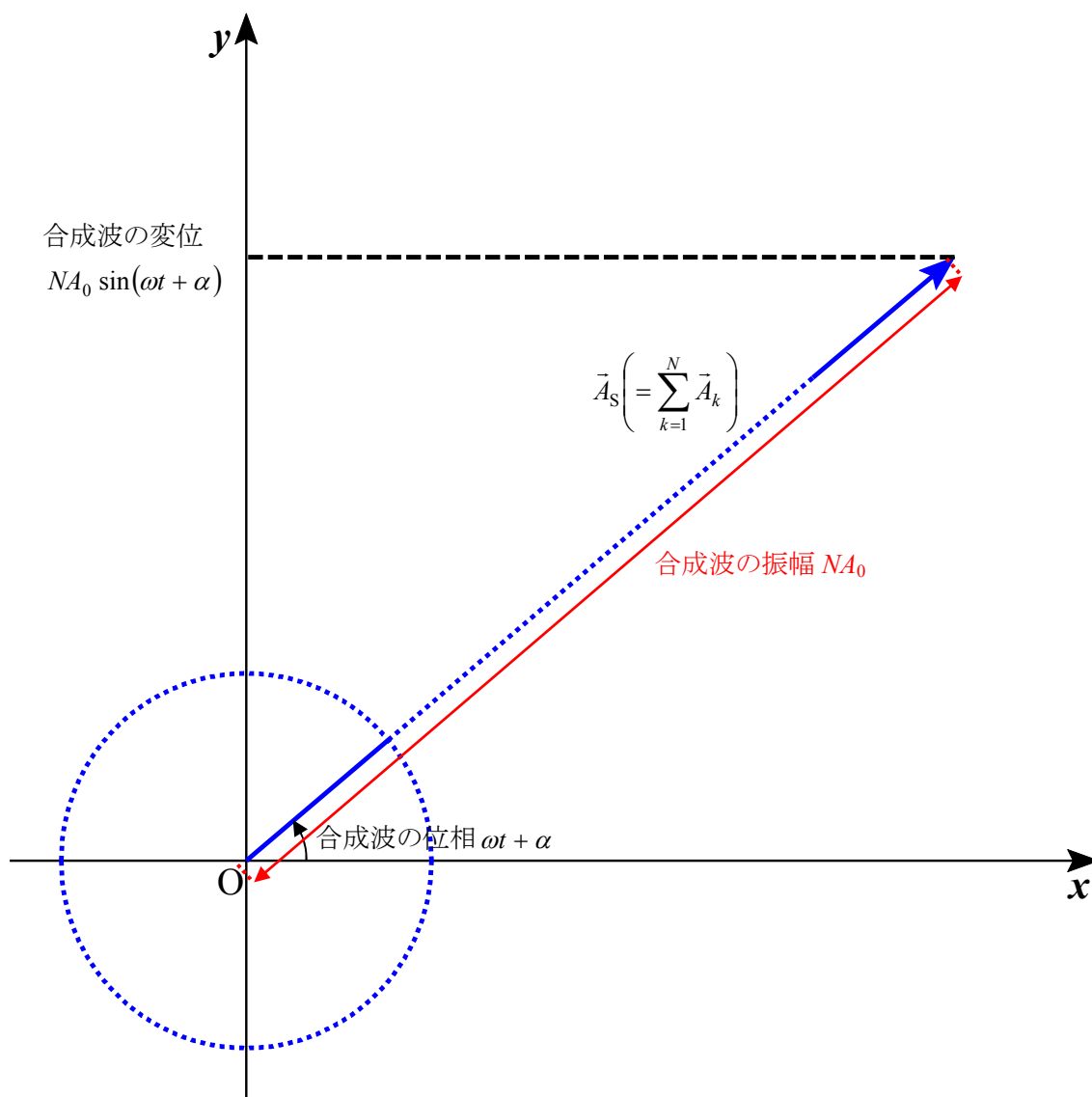
## 明線ができる場合

$\delta = 0$  より,  $\vec{A}_1 = \vec{A}_2 = \vec{A}_3 = \dots = \vec{A}_k = \dots = \vec{A}_N$  となるから,

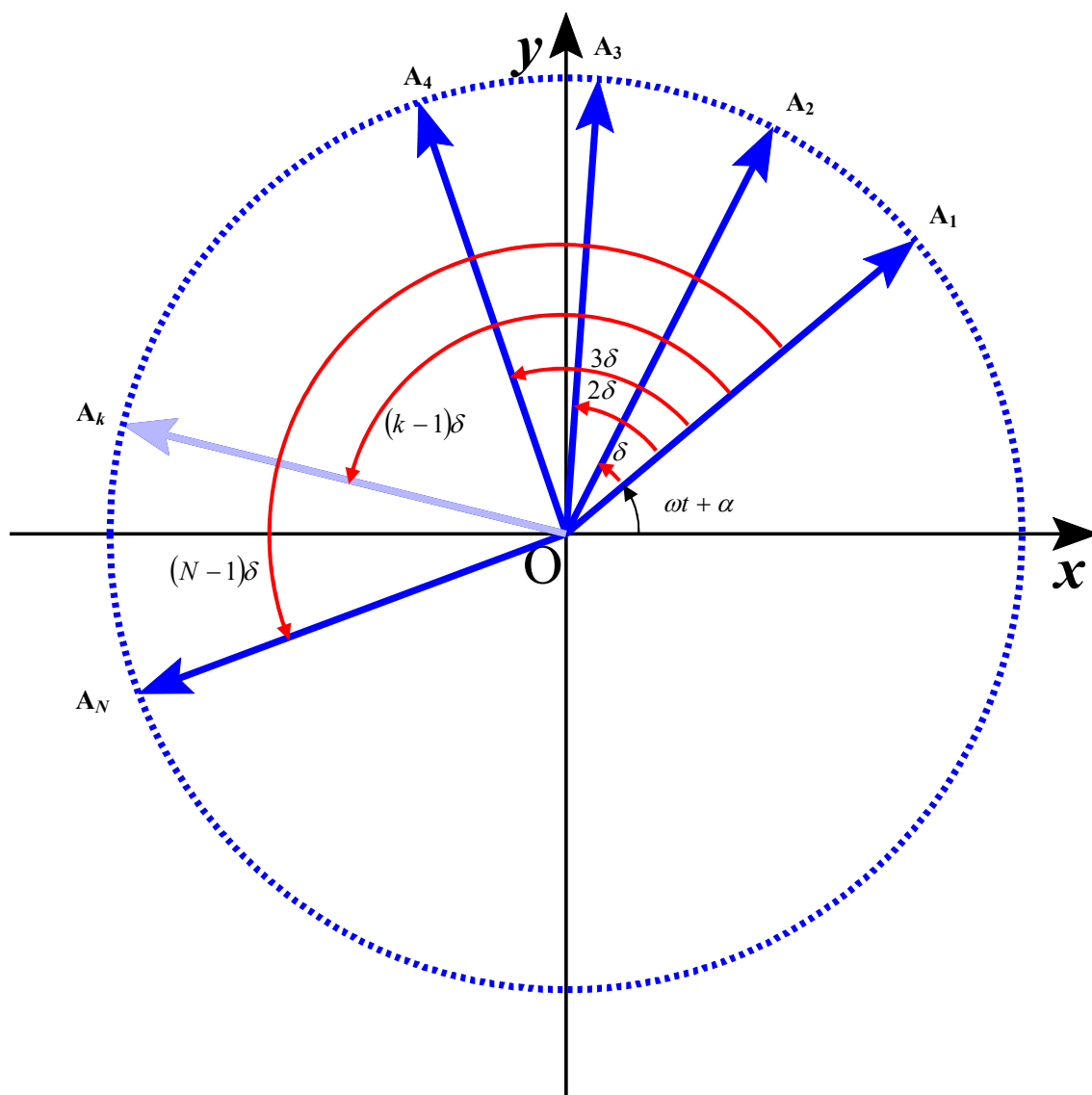
$|\vec{A}_S| = NA_0$ , 位相  $\omega t + \alpha$  より,  $Y_S = NA_0 \sin(\omega t + \alpha)$  となる。



これらのベクトルを継ぎ足すと次のようになる。

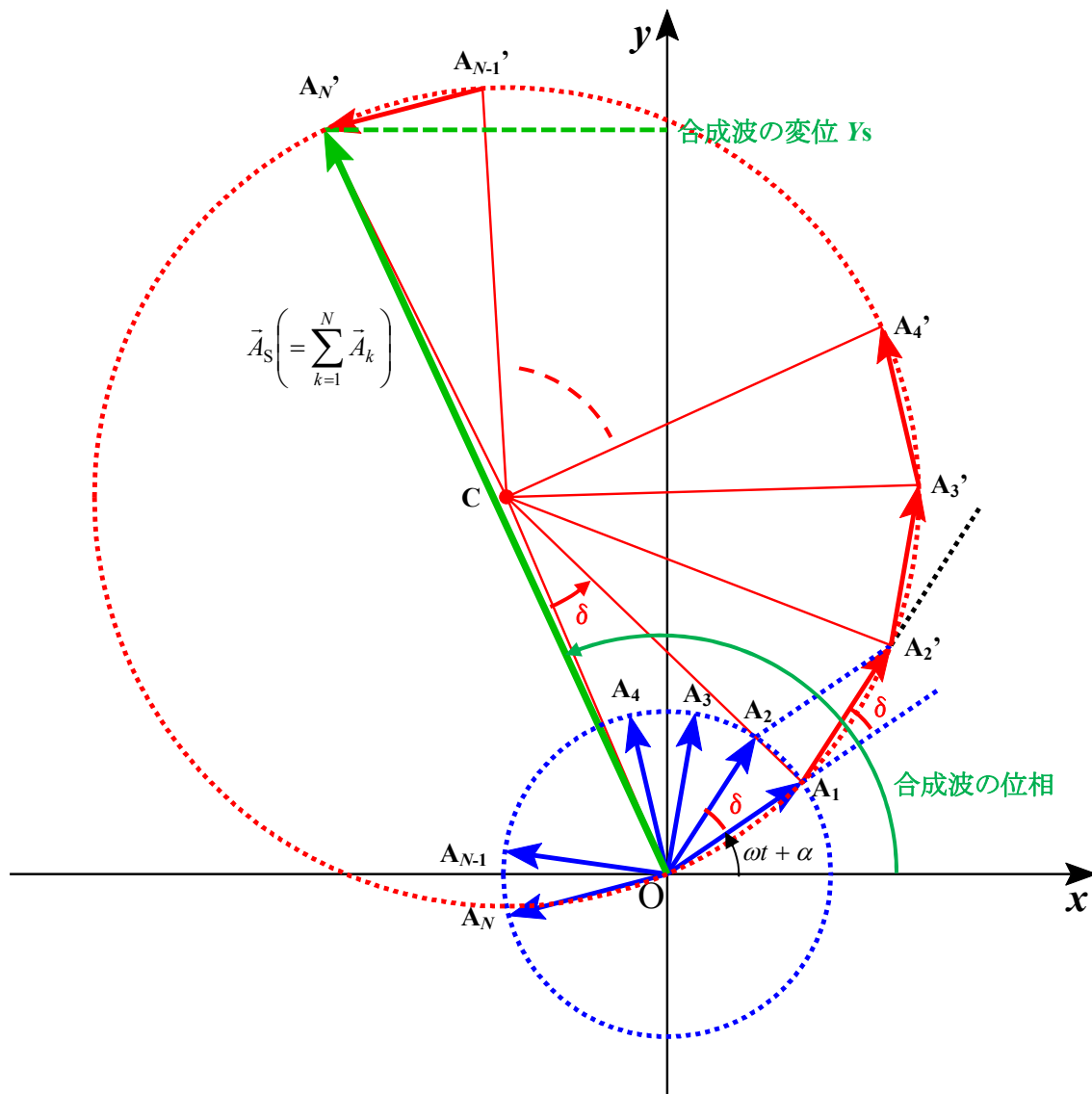


明線ができない場合



これらのベクトルを継ぎ足すと次のようになる。

$|\vec{A}_S|$  が合成波の振幅,  $Y_S$  は合成波の変位,  $\vec{A}_S$  と始線のなす角が合成波の位相



合成波の位相を求めてみる

円周角と中心角の関係よりから  $\angle A_N'OA_1 = \frac{1}{2} \angle A_N'CA_1$

$\angle CA_1O$  の外角と  $\triangle COA_1$  の内角の関係より,  $\delta + \angle CA_1A_2' = \angle OCA_1 + \angle COA_1 \dots \dots \textcircled{1}$

$\triangle COA_1 \equiv \triangle CA_1A_2' (\equiv \triangle CA_2'A_3' \equiv \dots \equiv \triangle CA_{N-1}'A_N')$  より,  $\angle COA_1 = \angle CA_1A_2' \dots \dots \textcircled{2}$

①, ②より,  $\angle OCA_1 = \delta$ ,  $\angle A_N'OA_1 = \frac{1}{2} \angle A_N'CA_1 = \frac{(N-1)\delta}{2}$

ゆえに, 合成波の位相 =  $\omega t + \alpha + \frac{(N-1)\delta}{2}$

## 合成波の振幅を求めてみる

## CO の長さ

$\angle CA_1O$  の外角と  $\triangle COA_1$  の内角の関係より,  $\delta + \angle CA_1A_2' = \angle OCA_1 + \angle COA_1$  . . . ①

$\triangle COA_1 \equiv \triangle CA_1A_2' (\equiv \triangle CA_2'A_3' \equiv \dots \equiv \triangle CA_{N-1}'A_N')$  より,  $\angle COA_1 = \angle CA_1A_2'$  . . . ②

①, ②より,  $\delta = \angle OCA_1$

$\triangle COA_1$  の頂点 C から底辺  $OA_1$  に下ろした垂線の足を H とすると,

$$CO \sin \angle OCH = OH \text{ より, } CO = \frac{OH}{\sin \angle OCH}$$

$\triangle COA_1$  は  $\angle C$  を頂角とする二等辺三角形だから,

$$\angle OCH = \frac{1}{2} \angle OCA_1 = \frac{\delta}{2}, \quad OH = \frac{OA_1}{2} = \frac{A_0}{2}$$

$$\text{よって, } CO = \frac{A_0}{2 \sin \frac{\delta}{2}} \quad \dots \text{ ③}$$

 $OA_N'$  の長さ

$\triangle CA_N'O$  について

$0 < N\delta < 2\pi$  とすると,

$\angle A_N'CO = N\delta$  ( $0 < N\delta < \pi$ ) または  $\angle A_N'CO = 2\pi - N\delta$  ( $\pi < N\delta < 2\pi$ ) . . . ④

頂点 C から底辺  $OA_N'$  に下ろした垂線の足を M とすると,  $OM = CO \sin \angle OCM$

$\triangle CA_N'O$  は  $\angle C$  を頂角とする二等辺三角形であるから,

$$\text{二等辺三角形の性質より, } \angle OCM = \frac{\angle A_N'CO}{2}, \quad OA_N' = 2OM$$

$$\text{よって, } OA_N' = 2CO \sin \frac{\angle A_N'CO}{2}$$

④をこれに代入すると,  $\angle A_N'CO$  が  $N\delta$  と  $2\pi - N\delta$  のいずれの場合においても

$$OA_N' = 2CO \sin \frac{N\delta}{2}$$

$$\text{これと③より, } OA_N' = 2 \cdot \frac{A_0}{2 \sin \frac{\delta}{2}} \sin \frac{N\delta}{2} = A_0 \cdot \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}}$$

また,  $N\delta = 2\pi$  のとき,  $A_N'$  は O と一致するから,  $OA_N' = 0$

これは上式を満たす。

$$\text{ゆえに, } OA_N' = A_0 \cdot \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \quad (0 < N\delta \leq 2\pi)$$

## 合成波の振幅

$$OA_N' \text{ を一般化すると, } \left| \vec{A}_S \right| = A_0 \left| \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \right| \quad (N\delta \text{ は任意の実数, } \delta \neq 0)$$

また,

$$\lim_{\delta \rightarrow 0} \left| \vec{A}_S \right| = A_0 \lim_{\delta \rightarrow 0} \left| \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \right| = A_0 \lim_{\delta \rightarrow 0} \left| \frac{\frac{\delta}{2} \cdot \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\frac{\delta}{2}}}{\frac{\delta}{2}} \cdot N \right| = NA_0 \text{ および } \delta = 0 \text{ のとき } \left| \vec{A}_S \right| = NA_0$$

より,

$\left| \vec{A}_S \right|$  は  $\delta = 0$  において連続である。

## 合成波の式を求めてみる

以上より,

$m$  次の明線と  $m+1$  次の明線の間での回折光の合成波の式は,

$$Y_S = A_0 \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \sin \left( \omega t + \frac{N-1}{2} \delta + \alpha \right)$$

$$\text{振幅: } \left| \vec{A}_S \right| = A_0 \left| \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \right|, \quad \text{位相: } \omega t + \frac{N-1}{2} \delta + \alpha$$

また, これより,

$$\frac{N\delta}{2} = n\pi \text{ のとき, すなわち } \delta = \frac{2n\pi}{N} \text{ のとき,}$$

振幅が 0 になることが, すなわちスクリーン上に暗線ができることがわかる。



## 多重スリット通過光の光路差と干渉による光強度

合成波の振幅は  $\delta = 0$  のとき最大であり、これを  $A_{\max}$  とすると  $A_{\max} = NA_0 \quad \therefore A_0 = \frac{A_{\max}}{N}$

$$\text{これと } \left| \vec{A}_S \right| = A_0 \left| \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \right| \text{ より, } \left| \vec{A}_S \right| = \frac{A_{\max}}{N} \left| \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \right| = A_{\max} \left| \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{N \sin \frac{\delta}{2}} \right|$$

光の強度は振幅の 2 乗に比例するから、

振幅が  $\left| \vec{A}_S \right|$  のときの光の強度を  $I_S$ 、振幅が  $A_{\max}$  のときの光の強度を  $I_{\max}$  とすると、

$$I_S = \left( \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{N \sin \frac{\delta}{2}} \right)^2 I_{\max}$$

スリット間隔を  $d$ 、回折角を  $\theta$  とすると、隣り合うスリットからの光線の光路差は  $d \sin \theta$

光路差の位相の一般形は  $2m\pi + \delta$  であるが、三角関数では、これを  $\delta$  としてよいから、

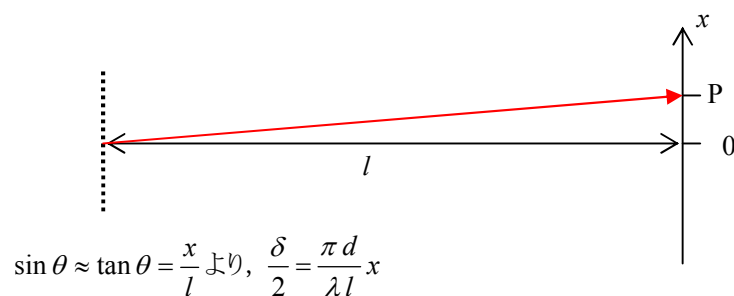
$$\delta : d \sin \theta = 2\pi : \lambda \text{ より, } \frac{\delta}{2} = \frac{\pi d \sin \theta}{\lambda}$$

よって、

スリット通過光（スリット間隔  $d$ 、スリット数  $N$ ）の干渉による明るさの相対強度は、

$$\text{回折角を } \theta \text{ とすると, } \frac{I_S}{I_{\max}} = \left\{ \frac{\sin \left( \frac{N\pi}{\lambda} d \sin \theta \right)}{N \sin \left( \frac{\pi}{\lambda} d \sin \theta \right)} \right\}^2 \text{ と表せる。}$$

ちなみに、スリットとスクリーン間の距離を  $l$ 、スクリーン上の点 P の座標を  $x$  ( $l \gg x$ ) とすると、



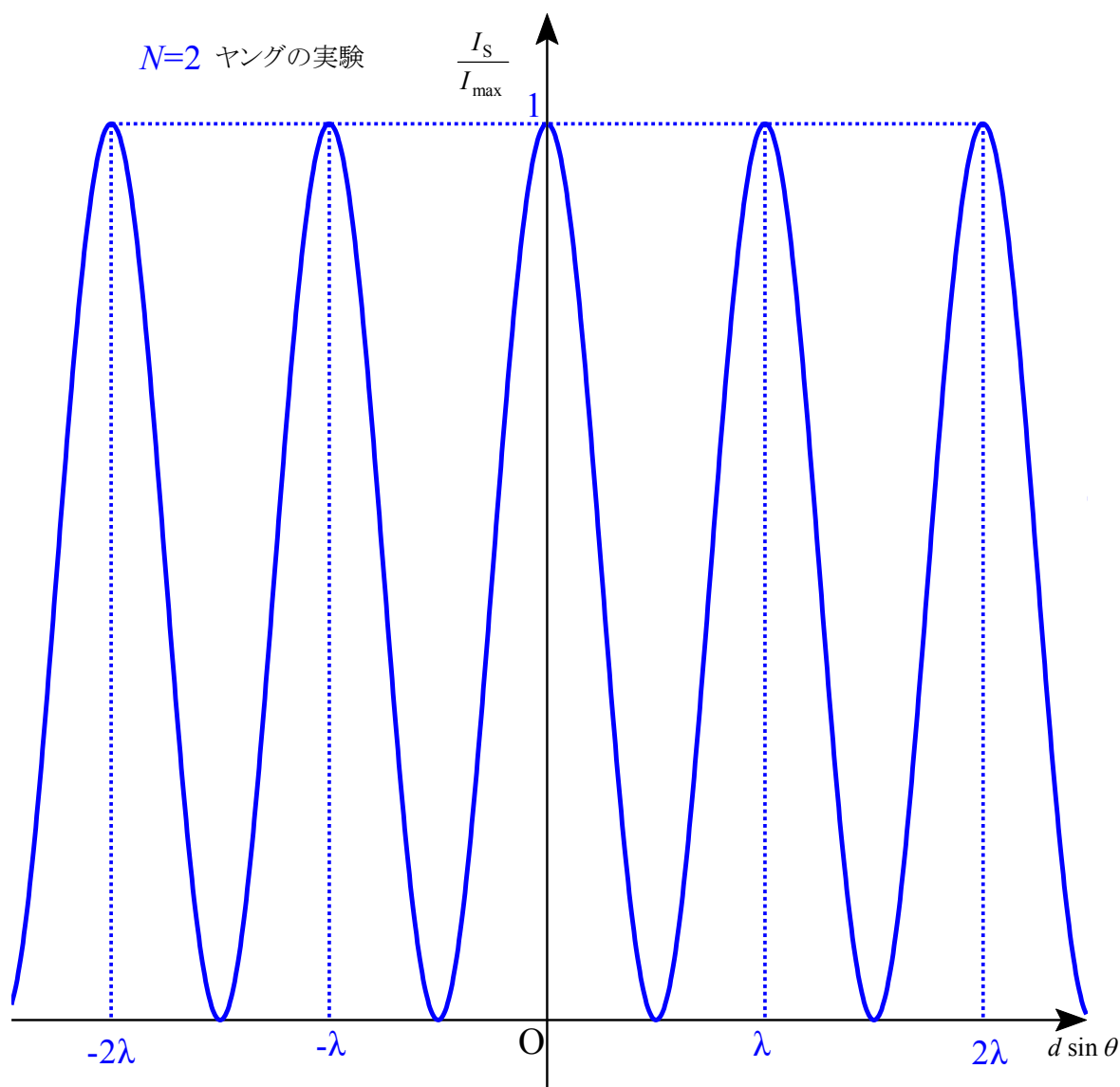
$$\text{これより、スクリーン上の座標と光の強度分布の関係式は } \frac{I_S}{I_{\max}} = \left( \frac{\sin \frac{N\pi d}{\lambda l} x}{N \sin \frac{\pi d}{\lambda l} x} \right)^2$$

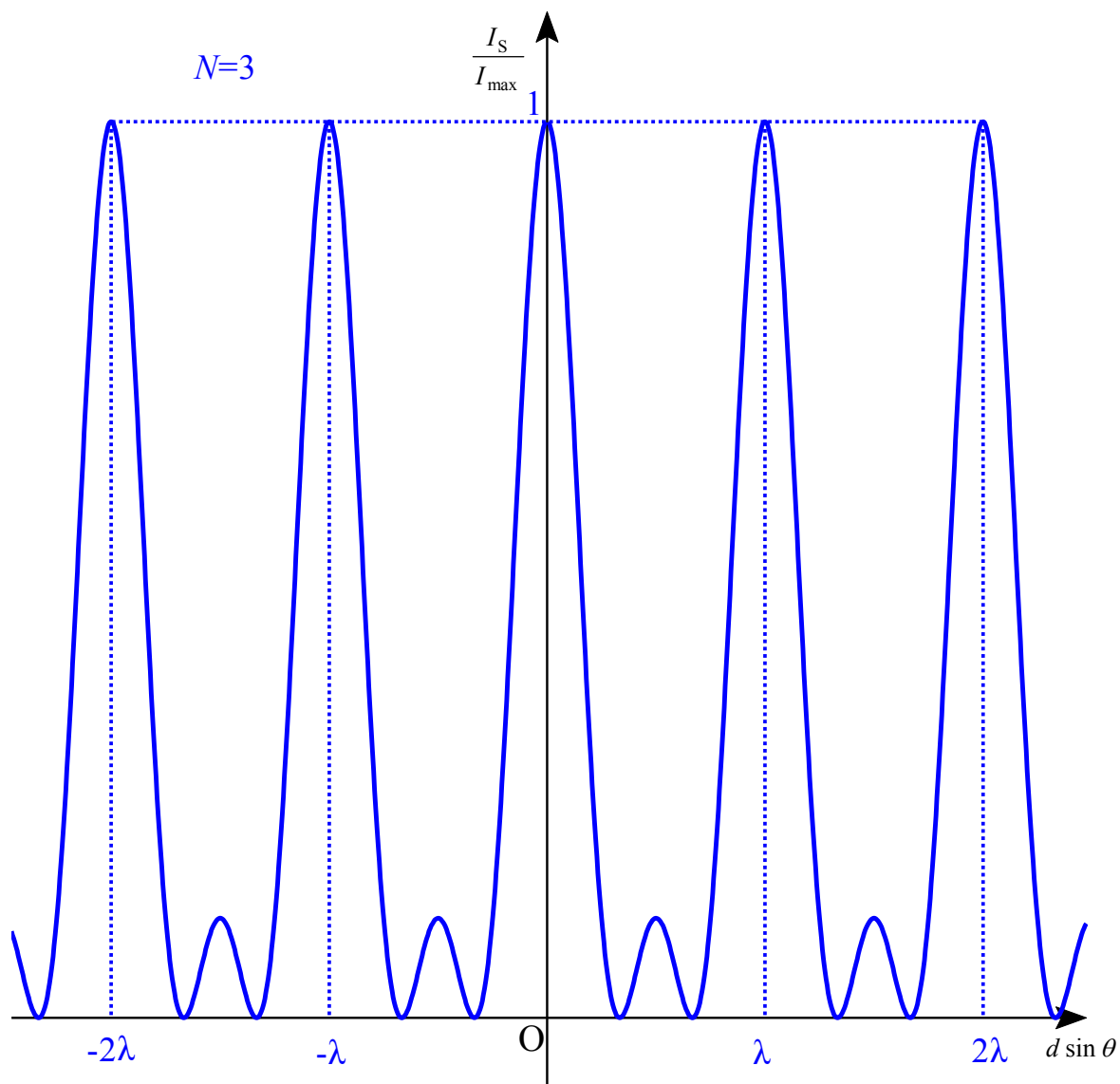
$$\text{光の強度分布 } \frac{I_s}{I_{\max}} = \left\{ \frac{\sin\left(\frac{N\pi}{\lambda} d \sin \theta\right)}{N \sin\left(\frac{\pi}{\lambda} d \sin \theta\right)} \right\}^2 \text{ を}$$

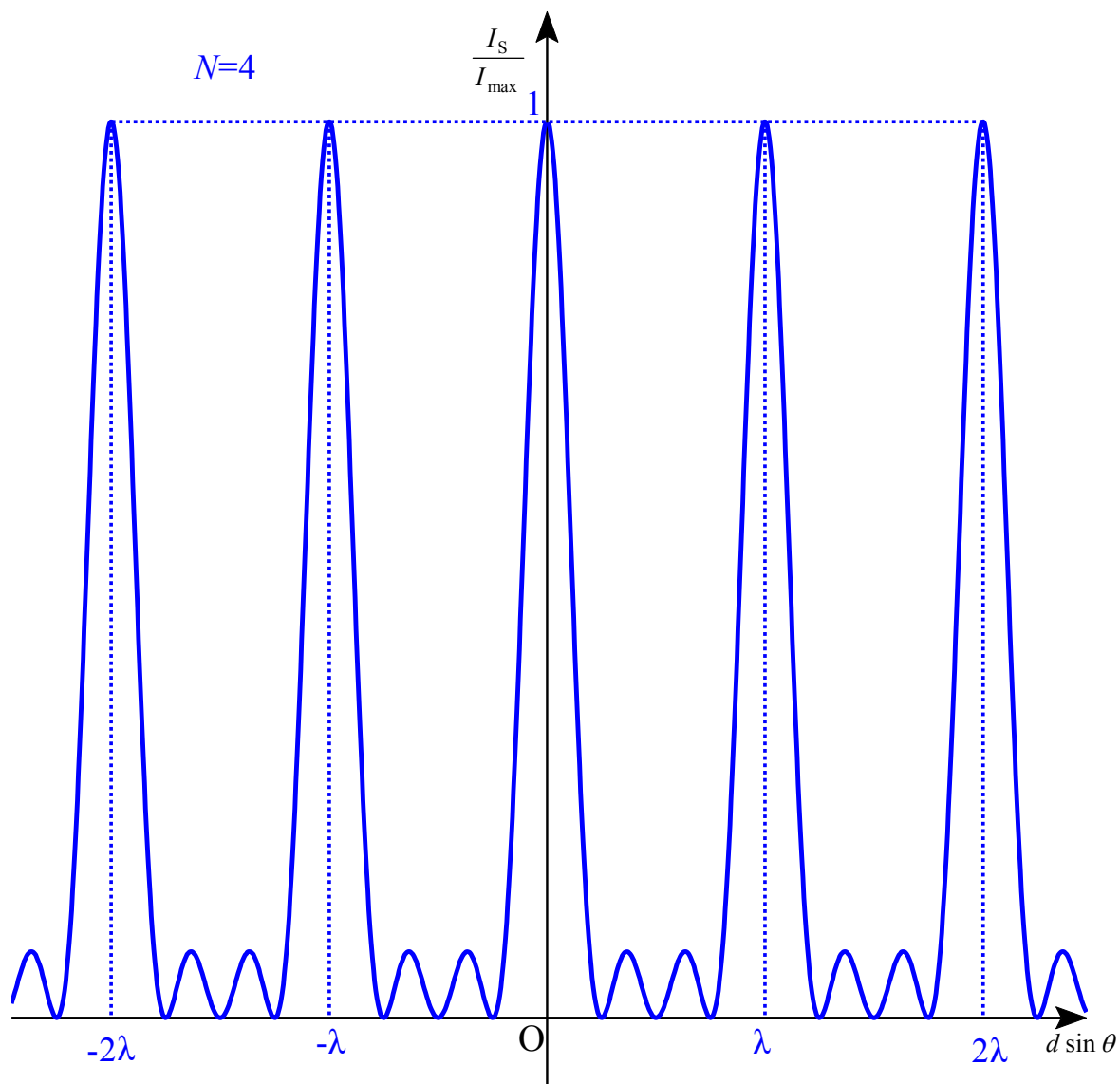
横軸を隣り合うスリットからの光線の光路差  $d \sin \theta$  ,

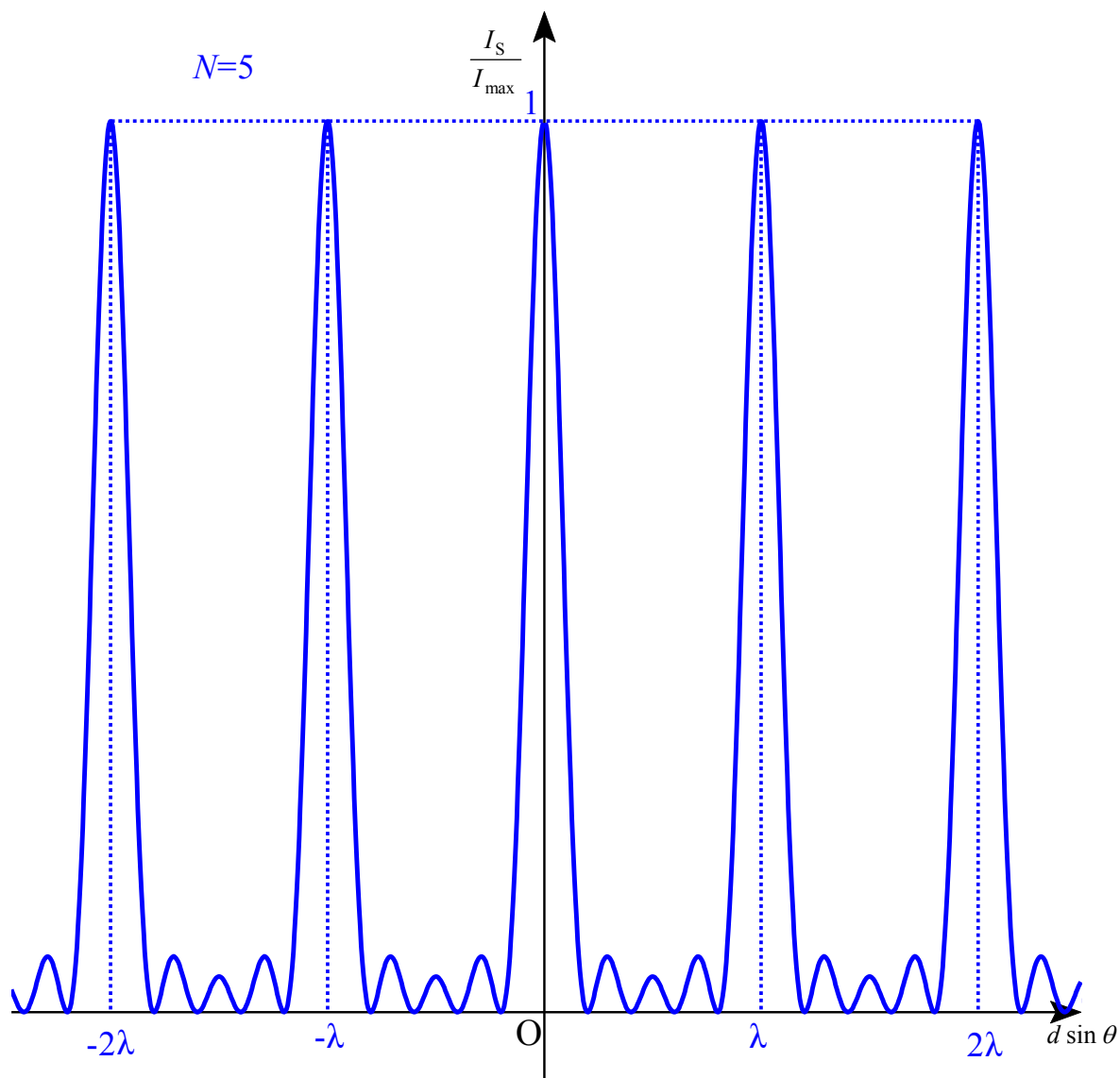
縦軸を通過光の干渉による相対強度  $\frac{I_s}{I_{\max}}$  とし,

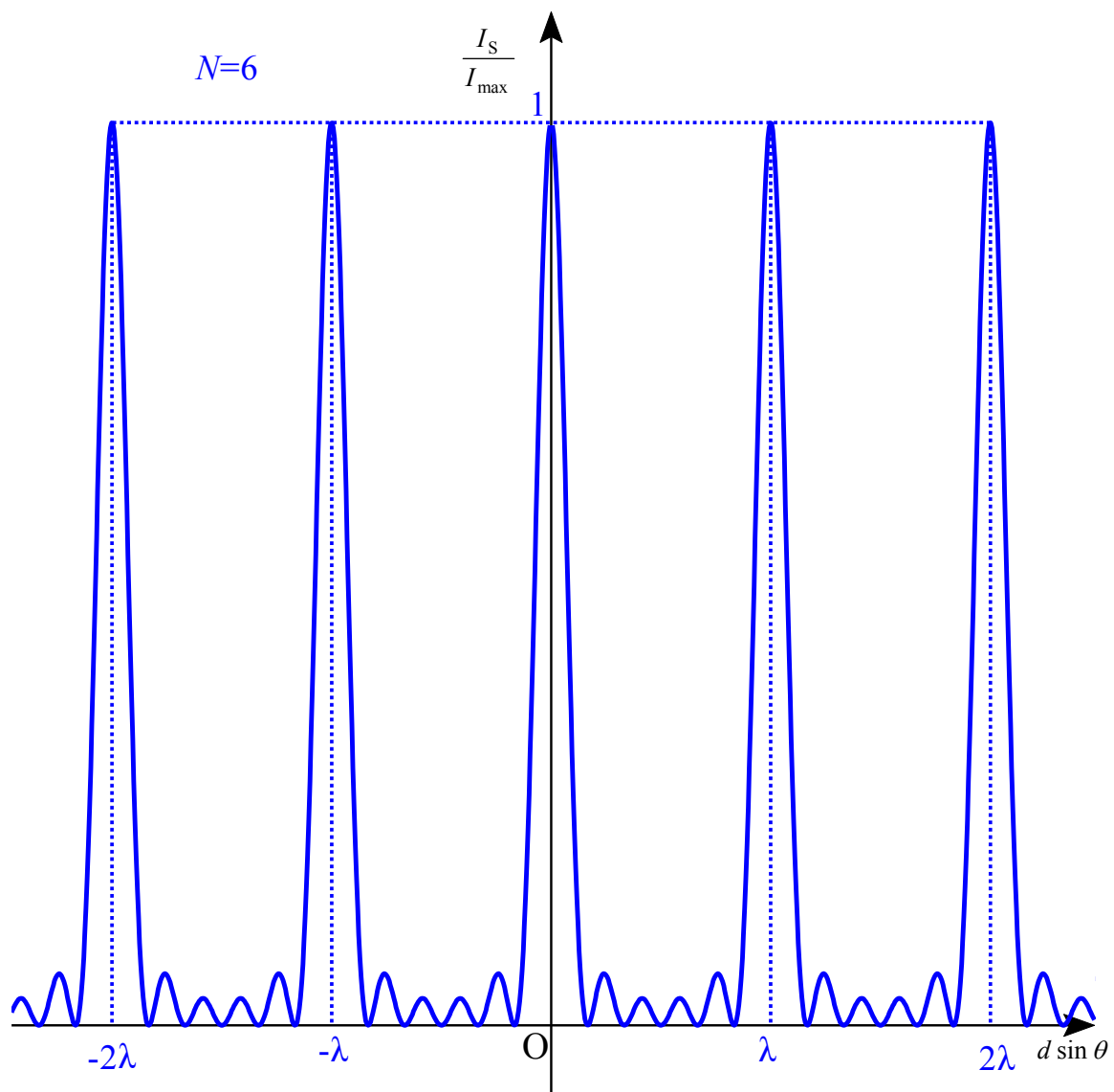
グラフを描くと,  $N$  が大きいほど明線がシャープになることがわかる。

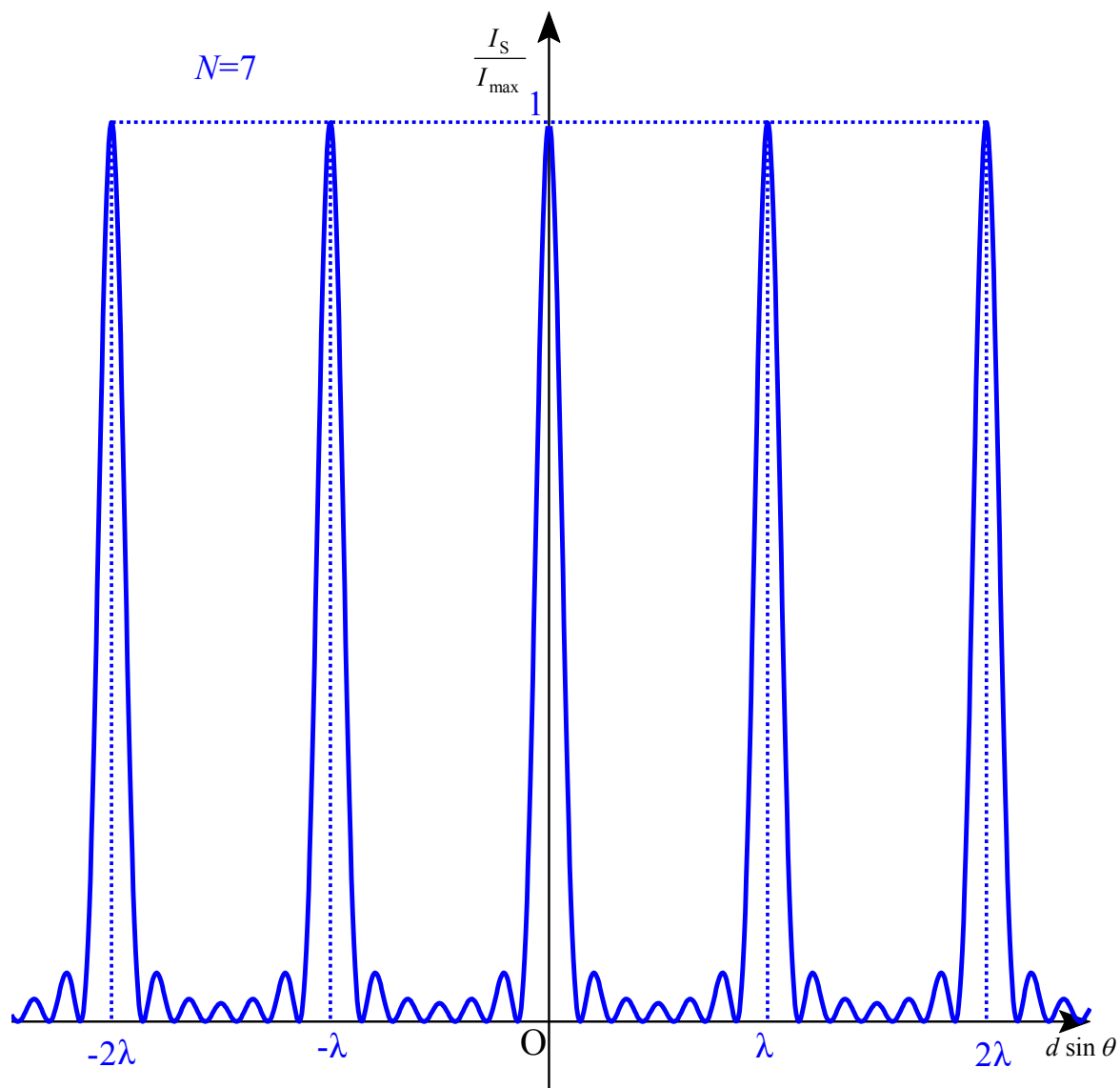


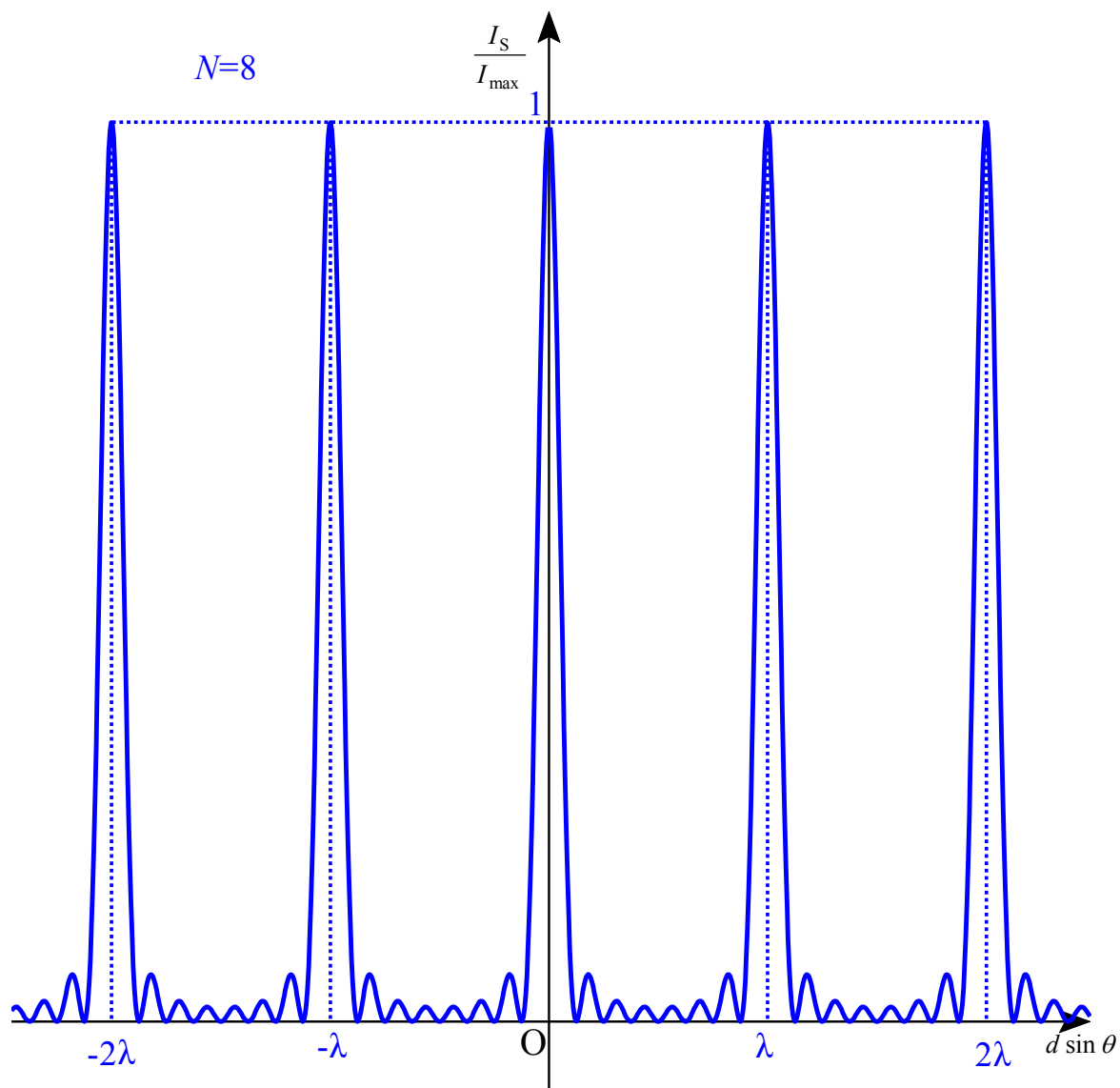




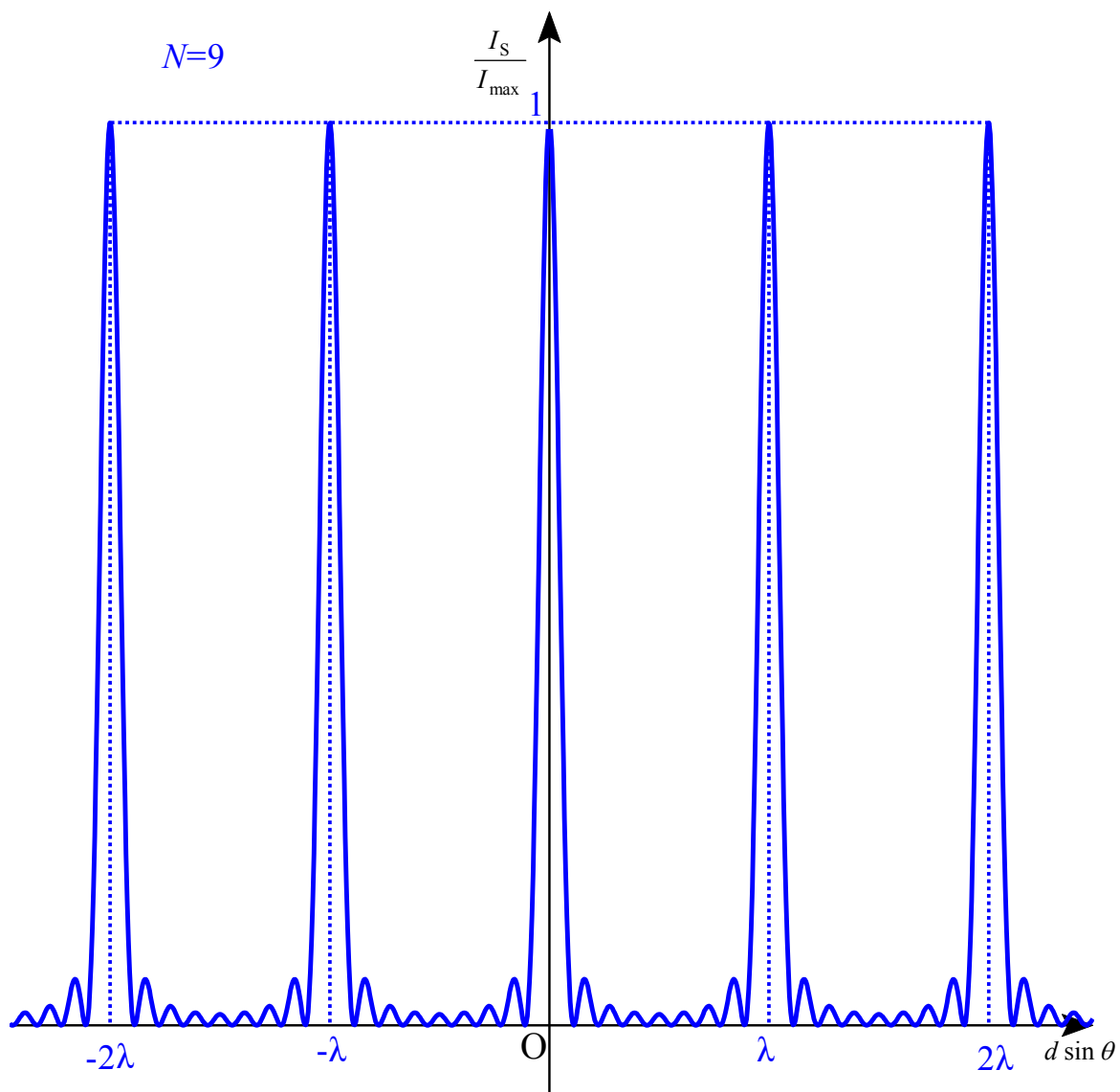


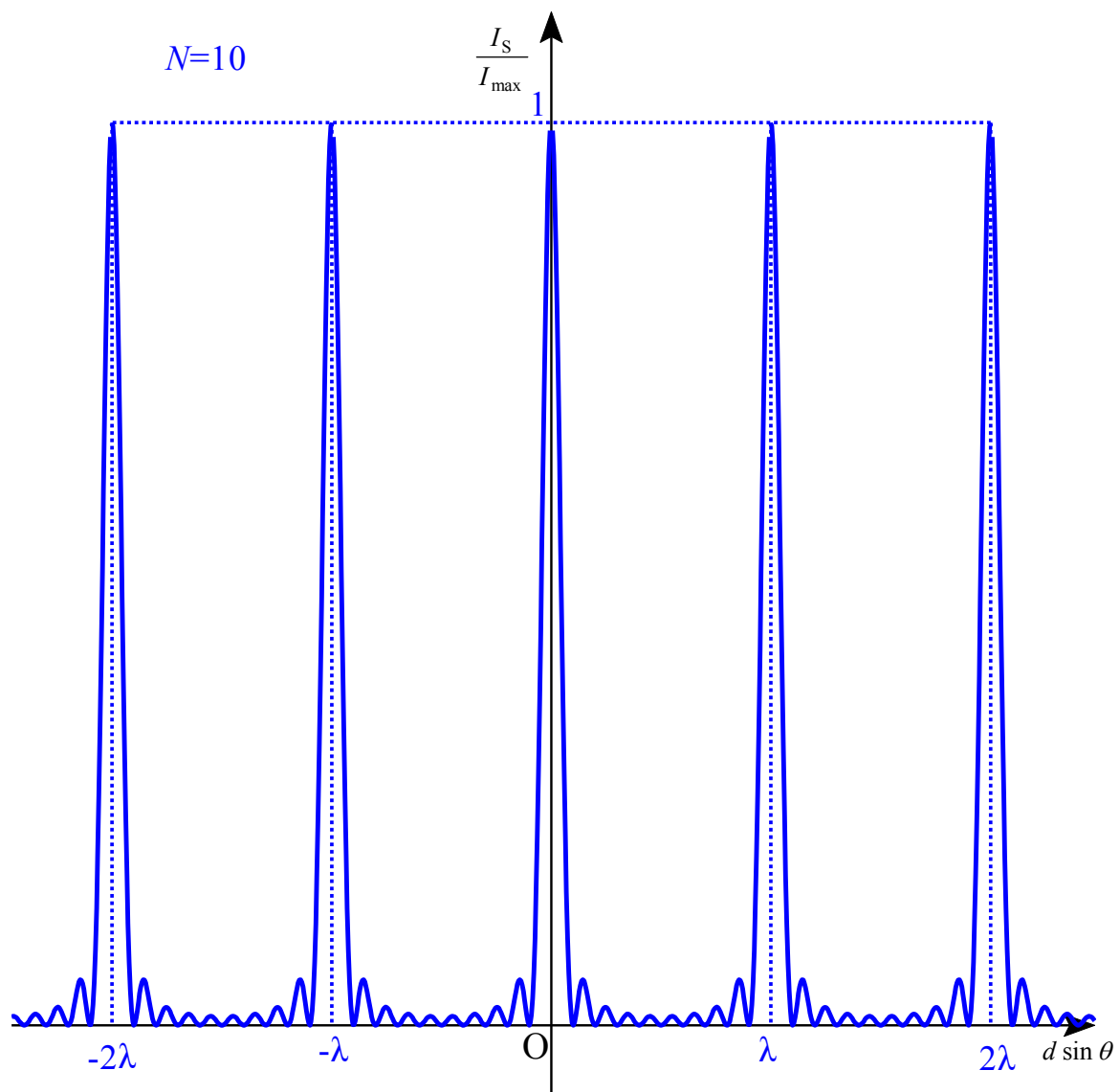












## 単スリット通過光の干渉による強度分布

スリット幅  $D$  の単スリットを間隔  $d$  で光線が  $N$  本通過すると仮定すると、

$d$  は十分小さいので、 $D = Nd \cdots \textcircled{1}$  としても問題ない。

また、光の強度分布の式は、回折角を  $\theta$  とすると、多重スリットの場合と同様に、

$$\frac{I_S}{I_{\max}} = \left\{ \frac{\sin\left(\frac{N\pi}{\lambda} d \sin\theta\right)}{N \sin\left(\frac{\pi}{\lambda} d \sin\theta\right)} \right\}^2 \quad \text{と表せ、これと}\textcircled{1}\text{より、} \quad \frac{I_S}{I_{\max}} = \left\{ \frac{\sin\left(\frac{\pi D \sin\theta}{\lambda}\right)}{N \sin\left(\frac{\pi d \sin\theta}{\lambda}\right)} \right\}^2 \quad \text{となる。}$$

しかし、

多重スリット通過光のように「通過光の間隔＝スリット間隔」という下限がないので、

通過光の光線間隔  $d$  は無限に小さい、すなわち  $N$  は無限に大きい。

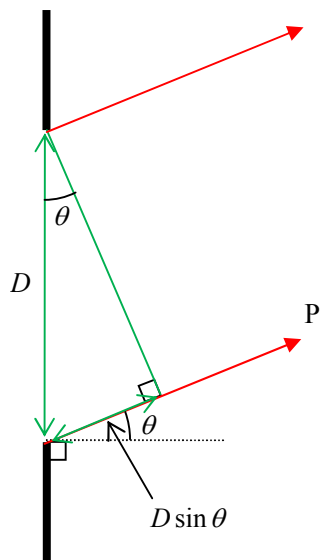
したがって、単スリットは無限多重スリットに例えることができ、

その通過光の干渉による強度分布は  $d \rightarrow 0$  のときの  $\frac{I_S}{I_{\max}}$  に従う。

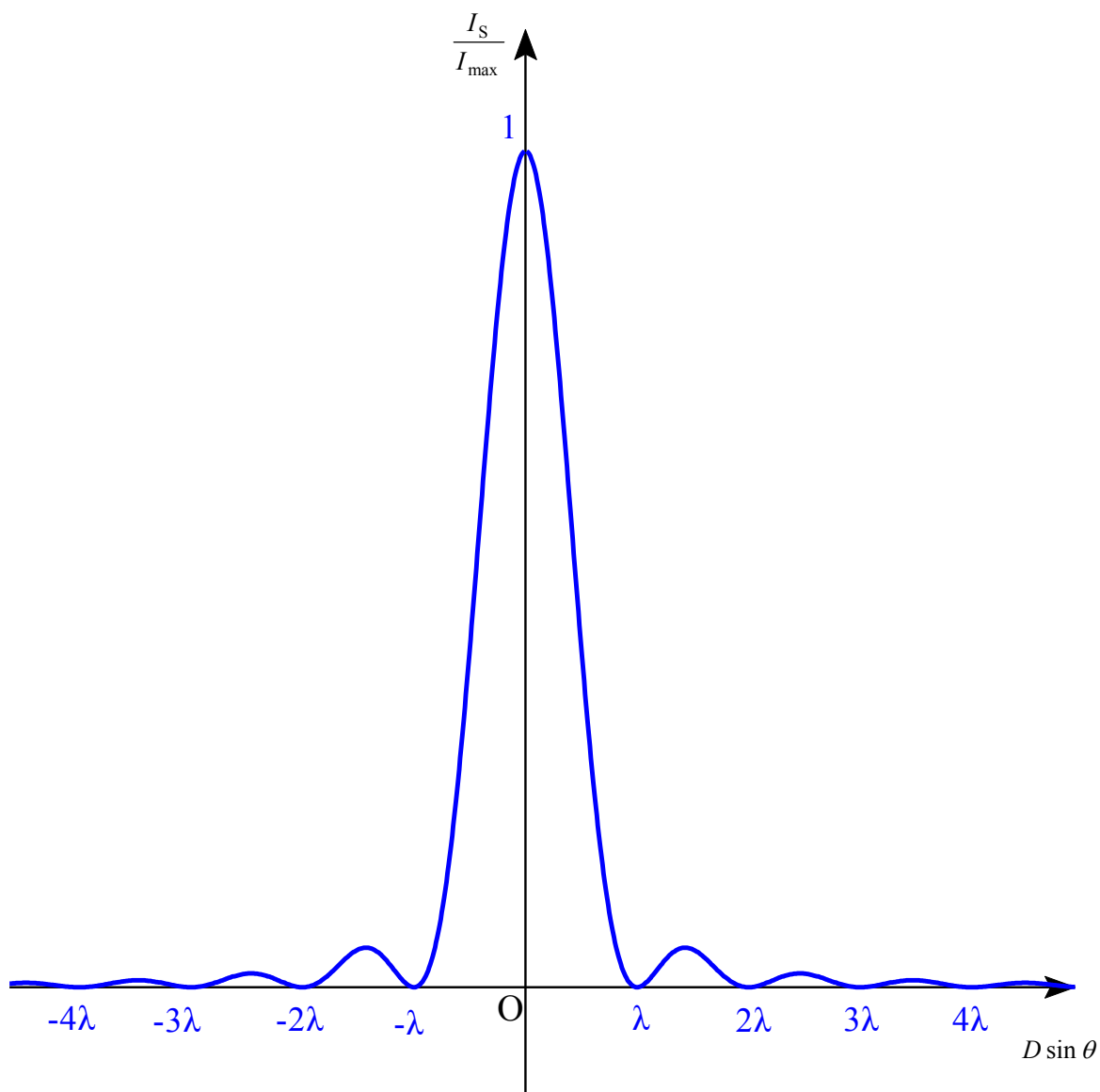
よって、

$$\begin{aligned} \frac{I_S}{I_{\max}} &= \lim_{d \rightarrow 0} \left\{ \frac{\sin\left(\frac{\pi D \sin\theta}{\lambda}\right)}{N \sin\left(\frac{\pi d \sin\theta}{\lambda}\right)} \right\}^2 \\ &= \lim_{d \rightarrow 0} \left\{ \frac{1}{N} \cdot \frac{\frac{\pi d \sin\theta}{\lambda}}{\sin\left(\frac{\pi d \sin\theta}{\lambda}\right)} \cdot \frac{1}{\frac{\pi d \sin\theta}{\lambda}} \cdot \sin\left(\frac{\pi D \sin\theta}{\lambda}\right) \right\}^2 \\ &= \lim_{d \rightarrow 0} \left\{ \frac{\frac{\pi d \sin\theta}{\lambda}}{\sin\left(\frac{\pi d \sin\theta}{\lambda}\right)} \cdot \frac{1}{\frac{\pi N d \sin\theta}{\lambda}} \cdot \sin\left(\frac{\pi D \sin\theta}{\lambda}\right) \right\}^2 \\ &= \lim_{d \rightarrow 0} \left\{ \frac{\frac{\pi d \sin\theta}{\lambda}}{\sin\left(\frac{\pi d \sin\theta}{\lambda}\right)} \cdot \frac{1}{\frac{\pi D \sin\theta}{\lambda}} \cdot \sin\left(\frac{\pi D \sin\theta}{\lambda}\right) \right\}^2 \\ &= \left\{ 1 \cdot \frac{\sin\left(\frac{\pi D \sin\theta}{\lambda}\right)}{\frac{\pi D \sin\theta}{\lambda}} \right\}^2 \end{aligned}$$

ゆえに、
$$\frac{I_s}{I_{\max}} = \left\{ \frac{\sin\left(\frac{\pi D \sin \theta}{\lambda}\right)}{\frac{\pi D \sin \theta}{\lambda}} \right\}^2$$



$\frac{I_s}{I_{\max}}$  と  $D \sin \theta$  の関係のグラフを次のページに示す。



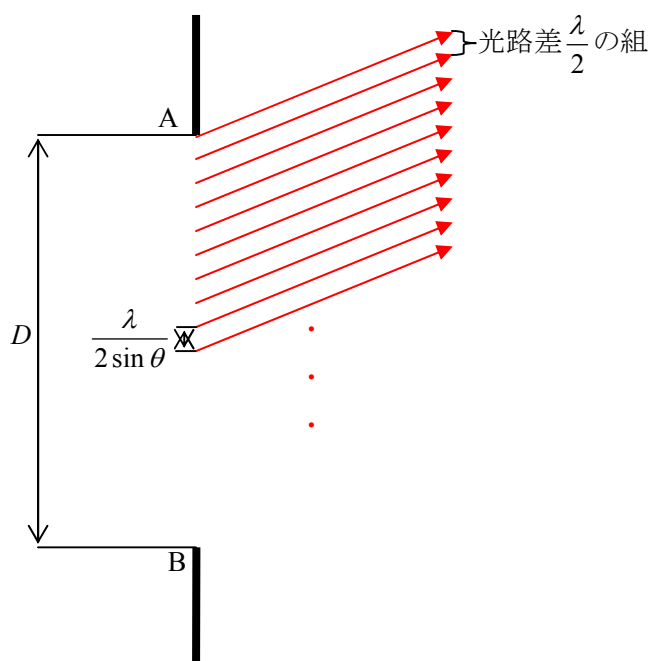
光路差が  $n\lambda$  ( $n$  は 0 でない整数) のとき、暗線ができるのがグラフからわかる。

その理由は、

下図のように、A の通過光から順に B にかけて光路差  $= \frac{\lambda}{2}$  の通過光を拾い上げていくと、

光路差  $\frac{\lambda}{2}$  の通過光は互いにその光強度を打ち消し合うから、

光路差  $\frac{\lambda}{2}$  の関係の組が整数組できるとき、これらの通過光の干渉による光強度は 0 になる。



光路差が  $\frac{\lambda}{2}$  となる通過光の間隔を  $d$  とすると、 $d \sin \theta = \frac{\lambda}{2}$  より、 $d = \frac{\lambda}{2 \sin \theta}$  だから、

このとき、次ページ図のように

$x_n \left( 0 < x_n < \frac{\lambda}{2 \sin \theta} \right)$  の通過光と  $x_n + \frac{\lambda}{2 \sin \theta}$  の通過光も打ち消し合いの関係になるので、

$x_n$  から B にかけて間隔  $\frac{\lambda}{2 \sin \theta}$  ごとに拾い上げた通過光の干渉による光強度も 0 になる。

よって、 $0 \leq x < \frac{\lambda}{2 \sin \theta}$  の通過光と  $\frac{\lambda}{2 \sin \theta} \leq x < \frac{2\lambda}{2 \sin \theta}$  の通過光がすべて打ち消し合い、

任意の  $x_n$  の通過光から始めても、AB 間で打ち消し合いの関係の組の数が整数できる。

ゆえに、AB 間のすべての通過光が打ち消し合う結果、スクリーン上に暗線ができる。

以上を整理すると,

AB 間(間隔  $D$ )を A から順に  $\frac{\lambda}{2 \sin \theta}$  の区間に分けていったとき,

その区間の数が

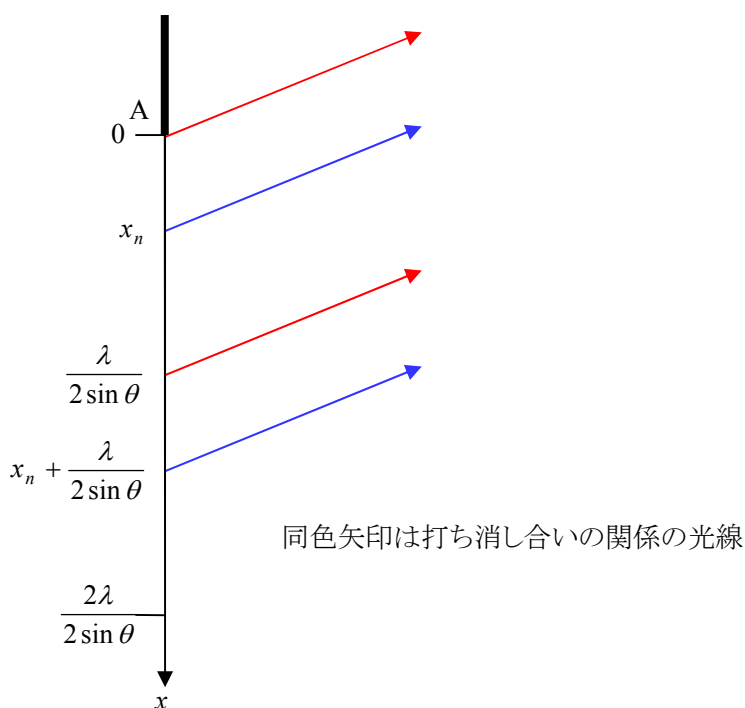
偶数ならば打ち消し合いの区間の組が整数できるので, スクリーン上に暗線ができる。

奇数ならば打ち消されない区間がまるまる 1 つ残るので, スクリーン上に明線ができる。

つまり,

暗線条件は  $D = \frac{\lambda}{2 \sin \theta} \times 2n$ , すなわち  $D \sin \theta = n\lambda$

明線条件は  $D = \frac{\lambda}{2 \sin \theta} \times (2n + 1)$ , すなわち  $D \sin \theta = \left(n + \frac{1}{2}\right)\lambda$



## 補足

$Y_S = A_0 \sum_{k=1}^N \sin\{\omega t + (k-1)\delta + \alpha\}$  から合成波  $Y_S$  の振幅と位相を求める。

初期位相を  $\alpha = 0$  としても合成波の振幅は変わらないから、  
簡単のため  $\alpha = 0$  の場合で考える。

数学(数列)で分数形の数列の和を部分分数分解を利用して解くことを学んだ。

$$\sum_{k=1}^n \frac{1}{k(k+1)} = \sum_{k=1}^n \left( \frac{1}{k} - \frac{1}{k+1} \right) = \left( 1 - \frac{1}{2} \right) + \left( \frac{1}{2} - \frac{1}{3} \right) + \cdots + \left( \frac{1}{n} - \frac{1}{n+1} \right) = 1 - \frac{1}{n+1} = \frac{n}{n+1}$$

この方法を一般化すると,  $\sum_{k=1}^n a_k = \sum_{k=1}^n (b_{k+1} - b_k) = b_{n+1} - b_1$  であり,

三角関数の場合, 積形の三角関数を, 積和の公式を使って, 和の形に変形できるから,  
この方法を利用することができる。

まず  $Y_S = A_0 \sum_{k=1}^N \sin\{\omega t + (k-1)\delta\}$  の両辺に  $\frac{2}{A_0} \sin \theta$  をかけ, 右辺の三角関数を積形にする。

$$Y_S \cdot \frac{2}{A_0} \sin \theta = A_0 \sum_{k=1}^N \sin\{\omega t + (k-1)\delta\} \times \frac{2}{A_0} \sin \theta$$

よって,

$$\begin{aligned} Y_S \cdot \frac{2}{A_0} \sin \theta &= \sum_{k=1}^N 2 \sin\{\omega t + (k-1)\delta\} \sin \theta \\ &= \sum_{k=1}^N [\cos\{\omega t + (k-1)\delta - \theta\} - \cos\{\omega t + (k-1)\delta + \theta\}] \end{aligned}$$

ここで,

$$2 \sin\{\omega t + (k-1)\delta\} \sin \theta = \cos\{\omega t + (k-1)\delta - \theta\} - \cos\{\omega t + (k-1)\delta + \theta\} \text{ より,}$$

$$2 \sin(\omega t + k\delta) \sin \theta = \cos\{\omega t + k\delta - \theta\} - \cos\{\omega t + k\delta + \theta\}$$

したがって,  $\sum_{k=1}^n a_k = \sum_{k=1}^n (b_{k+1} - b_k) = b_{n+1} - b_1$  が使えるためには,

$\theta > 0$  とすると,

$$\omega t + (k-1)\delta - \theta < \omega t + (k-1)\delta + \theta, \quad \omega t + k\delta - \theta < \omega t + k\delta + \theta \text{ より,}$$

$$\{\omega t + (k-1)\delta\} + \theta = (\omega t + k\delta) - \theta, \quad \text{すなわち } \theta = \frac{\delta}{2} \text{ であればよい。}$$

このとき,  $Y_S \cdot \frac{2}{A_0} \sin \theta = \cos(\omega t - \theta) - \cos[\omega t + (N-1)\delta + \theta]$  となるから,

$$Y_S \cdot \frac{2}{A_0} \sin \frac{\delta}{2} = \cos\left(\omega t - \frac{\delta}{2}\right) - \cos\left(\omega t + \frac{2N-1}{2}\delta\right)$$

さらに,  $\omega t - \frac{\delta}{2} = a - b$ ,  $\omega t + \frac{2N-1}{2}\delta = a + b$  とおけば,



$$Y_S \cdot \frac{2}{A_0} \sin \frac{\delta}{2} = 2 \sin a \sin b \text{ (積和の公式)}, \quad a = \omega t + \frac{N-1}{2} \delta, \quad b = \frac{N\delta}{2} \text{ より,}$$

$$Y_S \cdot \frac{2}{A_0} \sin \frac{\delta}{2} = 2 \sin \left( \omega t + \frac{N-1}{2} \delta \right) \sin \frac{N\delta}{2}$$

よって,

$$Y_S = A_0 \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \sin \left( \omega t + \frac{N-1}{2} \delta \right)$$

以上より,

$m$  次の明線と  $m+1$  次の明線の間での回折光の合成波の式は,

$$Y_S = A_0 \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \sin \left( \omega t + \frac{N-1}{2} \delta \right) \quad (0 < \delta < 2\pi) \text{ で与えられ,}$$

$$\text{初期位相を } \alpha \text{ とすると, } Y_S = A_0 \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \sin \left( \omega t + \frac{N-1}{2} \delta + \alpha \right) \text{ となる。}$$

$$\text{また, 振幅を } A_S \text{ とすると, } A_S = A_0 \left| \frac{\sin \frac{N\delta}{2}}{\sin \frac{\delta}{2}} \right|$$

これより,  $\frac{N\delta}{2} = n\pi$  のとき, すなわち  $\delta = \frac{2n\pi}{N}$  のとき,

$A_S = 0$ , すなわち明るさが 0 になることがわかる。

練習問題

次の数列の和を求めよ。

$$(1) \sum_{k=1}^n \sin k\theta \quad (0 \leq \theta < 2\pi) \quad (2) \sum_{k=1}^n \cos k\theta \quad (0 \leq \theta < 2\pi)$$

(1)

$$(i) \theta = 0 \text{ のとき } \sum_{k=1}^n \sin k\theta = 0$$

(ii)  $0 < \theta < 2\pi$  のとき

$$S_n = \sum_{k=1}^n \sin k\theta \text{ とおくと,}$$

$$\begin{aligned} \sin \alpha \cdot S_n &= \sum_{k=1}^n \sin \alpha \cdot \sin k\theta \\ &= \frac{1}{2} \sum_{k=1}^n \{\cos(k\theta - \alpha) - \cos(k\theta + \alpha)\} \\ &= \frac{1}{2} [\{\cos(\theta - \alpha) - \cos(\theta + \alpha)\} + \dots \\ &\quad + \{\cos(k\theta - \alpha) - \cos(k\theta + \alpha)\} + \{\cos((k+1)\theta - \alpha) - \cos((k+1)\theta + \alpha)\} + \dots \\ &\quad + \{\cos(n\theta - \alpha) - \cos(n\theta + \alpha)\}] \end{aligned}$$

$$\text{ここで, } k\theta + \alpha = (k+1)\theta - \alpha \text{ とすると, } \alpha = \frac{\theta}{2} \quad \dots \textcircled{1}$$

$$\text{また, } \sin \alpha \cdot S_n = \frac{1}{2} \{\cos(\theta - \alpha) - \cos(n\theta + \alpha)\} \quad \dots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1}, \textcircled{2} \text{ および } 0 < \frac{\theta}{2} < \pi \text{ より, } S_n = \frac{\cos \frac{\theta}{2} - \cos \left(n + \frac{1}{2}\right)\theta}{2 \sin \frac{\theta}{2}}$$

$$\text{あるいは, } \cos \frac{\theta}{2} - \cos \left(n + \frac{1}{2}\right)\theta = 2 \sin \frac{n+1}{2}\theta \cdot \sin \frac{n}{2}\theta \text{ より, } S_n = \frac{\sin \frac{n+1}{2}\theta \cdot \sin \frac{n}{2}\theta}{\sin \frac{\theta}{2}}$$

$$(i), (ii) \text{ より, } \theta = 0 \text{ のとき, } \sum_{k=1}^n \sin k\theta = 0$$

$$0 < \theta < 2\pi \text{ のとき, } \sum_{k=1}^n \sin k\theta = \frac{\cos \frac{\theta}{2} - \cos \left(n + \frac{1}{2}\right)\theta}{\sin \frac{\theta}{2}} = \frac{\sin \frac{n+1}{2}\theta \cdot \sin \frac{n}{2}\theta}{\sin \frac{\theta}{2}}$$

(2)

(i)  $\theta = 0$  のとき

$$\sum_{k=1}^n \cos k\theta = n$$

(ii)  $0 < \theta < 2\pi$  のとき

$$T_n = \sum_{k=1}^n \cos k\theta \text{ とおくと,}$$

$$\begin{aligned} \sin \beta \cdot T_n &= \sum_{k=1}^n \cos k\theta \cdot \sin \beta \\ &= \frac{1}{2} \sum_{k=1}^n \{\sin(k\theta + \beta) - \sin(k\theta - \beta)\} \end{aligned}$$

$$\text{ここで, } k\theta - \beta = (k+1)\theta + \beta \text{ とすると, } \beta = -\frac{\theta}{2} \quad \dots \textcircled{3}$$

$$\text{また, } \sin \beta \cdot T_n = \frac{1}{2} \{\sin(\theta + \beta) - \sin(n\theta - \beta)\} \quad \dots \textcircled{4}$$

③, ④および  $0 < \frac{\theta}{2} < \pi$  より,

$$T_n = \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)\theta - \sin \frac{\theta}{2}}{2 \sin \frac{\theta}{2}} \text{ または } T_n = \frac{\sin \frac{n}{2} \theta \cdot \cos \frac{n+1}{2} \theta}{\sin \frac{\theta}{2}}$$

(i), (ii) より,

$$\theta = 0 \text{ のとき, } \sum_{k=1}^n \cos k\theta = n$$

$$0 < \theta < 2\pi \text{ のとき, } \sum_{k=1}^n \cos k\theta = \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)\theta - \sin \frac{\theta}{2}}{2 \sin \frac{\theta}{2}} = \frac{\sin \frac{n}{2} \theta \cdot \cos \frac{n+1}{2} \theta}{\sin \frac{\theta}{2}}$$